第5章 異なる道

01 — 手紙に書かれた住所

その住所は、もはや存在しないはずの診療所のものだった。ヘリックス社は二十三年前に一般向けの事務所を閉鎖した。それでも、マーサー通りの建物の電気料金は今なお誰かが払い続けている。ロイ、レイチェル、クロノスが日の出直後に到着すると、曇りガラスの窓の奥には細い青い明かりが見えた。

建物に要塞のような備えはなかった。配達員が壁にもたれて朝食を食べ、通りの向こうでは露店商が雨漏りするひさしの下で開店の準備をしていた。ロイには、武装した警備員が並んでいるよりも、無防備な様子のほうが不気味だった。中の人々には、侵入者を追い返す別の手段があるということだ。

クロノスは封印された治療経過記録を上着の下に抱えていた。自分で持って行くと言い張ったのだ。独立審査委員会は、同意なしに患者の名前を公開しないという条件で、三人に過去の患者記録を調べる許可を与えていた。

ノックする前に、地味な灰色の制服を着た女性が扉を開けた。レイチェル、ロイを順に見て、最後に少年へ目を向けた。

「患者さんが来るかもしれないと聞いていました」と彼女は言った。

「どの患者？」とクロノス。

女性はしばらく少年を見つめた。「それをあなたに教えてもらえるかと思っていたんです」

彼女はマーラ・センと名乗った。医師でも会社の代理人でもない。ヘリックスに最後まで残った独立医療資料庫の管理人だ。ダニエル・リードが最初の再建身体で生きていたころ、彼女は記録係の見習いだった。歳月で肩は曲がっていたが、その目は鋭かった。

「昔の予約票に名前が残っています」と彼女。「ダニエル・リード。誰も取り消し線を引かなかった」

クロノスは予約票に手を伸ばさなかった。「それが僕の名前だとは言っていない」

「なら、あなたをそう呼びません」

マーラが道を空けた。少年は、自分の意思で中へ入った。

02 — 事故より前

マーラが最初に見せたのは医療記録ではなかった。事故の何年も前、タイレル社に宛てたごく普通の退職届だった。折り目の紙は黄ばみ、署名の周囲ではインクが薄れている。ダニエル・リードは、J・F・セバスチャンの下で従事していた研究任務からの解放を申し出

ていた。

余白に書かれたセバスチャンの注記を、レイチェルは見覚えていた。《腕は確か。質問が多すぎる。彼を失うな》

彼女は紙にそっと触れた。「信頼している人について、こう書く人だったわ」

「なら、なぜダニエルは辞めた？」とロイ。

マーラは添付された覚書を開いた。タイレル社の研究所では、レプリカントの予定寿命を、生物学的制約ではなく契約上の要件として扱い始めていた。ダニエルは、繰り返し再生させた人工臓器の不安定性を研究していた。対象者の命を延ばせる治療を、製品の買い替え周期を守るために秘匿すべきではない、と主張した。

「英雄的な退職ではありません」とマーラ。「彼は別の会社に応募し、給与を交渉し、自分の部屋に不平を言って、去りました。関係者の多くは、その論争を忘れてしまいました」

競合企業のヘリックス・バイオロジクスは、独立した医療部門を提供すると約束した。患者の利用権、継続的な治療、再生医療の独立性。ダニエルが信じたい言葉が提案書には並んでいた。彼が引き寄せられるだけの現実味はあった。取締役会に約束を守る意思があったかは、また別の問題だ。

「セバスチャンは引き留めた？」とクロノス。

「いいえ」とレイチェル。「推薦状を書いたの」

マーラは二枚目の紙を取り出した。セバスチャンの素早く不揃いな筆跡で、のちにダニエルが下線を引いた一文がある。《彼がどんな科学者になりたいのか、自分で見つけさせてやれ》

クロノスは二度読んだ。「彼が何者かを決めつけるのとは違うね」

ロイは、レイチェルが両手を重ねるのを見ていた。彼女の覚えている若い助手には、去る自由があった。ずっと後に雨の道路で車に衝突されると、別の企業が、彼を生かしている以上、彼を所有し続ける権利もあると言い出した。

03 — 開いたままの扉

ヘリックスは初めから監獄として設立されたわけではなかった。初期の写真には、共同作業場、開放された診察室、新しい義肢が日常の動作でどう故障するかを技師に教える患者たちが写っていた。一枚には、ダニエルが両手でカップを載せた盆を支え、ようやく委員会が耳を傾けたことに笑う姿があった。

やがて写真は変わった。廊下は狭くなり、扉には生体認証装置が付き、患者諮問委員会は議事録から消えた。代わって常設の製品保安部門が現れた。

マーラは真鍮の鍵で資料庫の内室を開いた。「保安部門は今もネットワーク認証を前提にしています。でも、この錠はネットワークの命令を聞きません」

中には、手書きの札を貼ったスライドガラスが並ぶ作業台があった。封印された戸棚には、生きた神経接合部の試作品が液体に浸されていた。保存液は自動ポンプではなく人の手で交換されてきた。ここではかつて、他社製の組織とも適合する交換臓器を作ろうとしていた。

「ダニエルがこの手順を書いたの？」とクロノス。

「ええ。ヘリックスの外でも理解できるように設計したんです」

「会社の商売を脅かしただろうな」とロイ。

「実際に脅かしました」

マーラは署名のない社内メモを渡した。経営陣は社外との互換性試験をすべて停止させた。一か月後、医療部門は軍への調達計画に組み込まれた。

クロノスは部屋を見回した。彼は、鍵の掛かった扉や消えた委員会より複雑な秘密を想像していた。記録が示したのはもっと悪いことだった。別の選択もできた人々が積み重ねた、ありふれた決定の連続だ。

「なぜこの部屋を残したの？」

「新しい棟の扉は、お金のない人には開かなくなったから」とマーラ。「誰かが一つは開けておかなければ」

04 — 身体のない署名

正午、廊下で警報が鳴った。サイレンではない。圧力センサーにつながる乾いた機械式のベルだった。マーラの顔から血の気が引いた。

「資料庫を見つけられたんです」

民間人の上着を着た二人の請負業者がロビーに入ってきた。身分証には、ヘリックスの医療特許を継承した会社の代理人とある。二人は、名を伏せられた連続性対象者に関連する原本すべてを回収できるという保全命令書を持っていた。

ロイは命令書を読んだ。患者の名前は在庫番号に置き換えられていた。「あんたたちが主張しているのは記録についての権利だ」と言った。「そこに書かれた人物への権利じゃない」

一人が制御盤に手を伸ばした。外の隔離車両から監視していたヌルが、制御盤に遠隔停止要求が届いたとレイチェルに知らせた。入口の扉が施錠され、冷蔵装置の温度が上がり始めた。

「証拠を壊すとは、変わった保全の仕方ね」とレイチェル。

業者は否定しなかった。「材料は不安定です。認可された技術者しか維持できません」

マーラは手書きの保守記録を指した。「三十一年間、私が安定させてきました」

ロイなら扉を力ずくで開けられた。だがそうせず、ヌルに冷蔵設備の変化をすべて記録させ、独立審査委員会の緊急担当書記へ連絡し

た。四分後、書記は資料の持ち出しと破壊を禁止する命令を出した。その四分は、戦闘より長く感じられた。

物理的な証拠封印具を持った市の証人が到着すると、業者たちは引き下がった。だが彼らが去っても部屋が安全になったわけではない。支配権を手放すくらいなら、自社の記録が劣化しても構わないと考えていたことが証明されただけだ。

クロノスは温まり始めた戸棚に手を当てた。「自分たちが何を殺そうとしているのかさえ知らない」

「知っているのかもしれない」とロイ。「だから原本が必要なんだ」

05 — 患者の条件

冷蔵装置が復旧すると、マーラは会社の公式経過記録に載っていない文書を見せた。ダニエルが最初のリハビリの数年間に書いたものだ。新しい手術のたびに、承認範囲が広がる研究許可書への署名を求められると気づいていた。

最初の一行にはこうある。《私は治療に同意する。所有されることには同意しない》

残りの数ページは、それほど印象的な文句ではないが、より正確だった。ダニエルは独立した医療審査、自分の身体に移植された組織の仕様を知る権利、通常の治療を失うことなく処置を拒否する権利を求めた。自身の記録の写しも欲していた。何より、未来の彼を会

社が納品する予定の設備として扱うことをやめてほしかった。

その文書の次には、拒絶の印が押されていた。取締役会は、彼の要求が会社の保安義務と両立しないと判断したのだ。

「ヘリックスを辞めようとする前のこと？」とレイチェル。

「ずっと前です」とマーラ。「彼は交渉を続けていました」

クロノスが顔を上げた。「そんなに賢い人なら、どうして別の場所で身体を作らなかったの？」

「病気だったからです」とマーラ。「臓器の仕組みを知っていても工場があるとは限りません。どれほど優秀な人でも、怖くなるし疲れるものです」

少年は小さな手を見下ろした。ロイには、ダニエルを何世紀もの生存を計画した天才にしたくなる誘惑が分かった。彼の選択の多くが脅迫のもとでなされたと認めるより、そのほうが簡単だからだ。

「自分の記録はもらえた？」とクロノス。

マーラは苦笑した。「数ページだけ。それをここへ持ってきました」

最後の紙にダニエルの手書きがある。《私の名を使ってこれを読む別の誰かがいたら、その人が何を望むか尋ねてほしい。私の望みを押しつけないでほしい》

クロノスは紙を折り、コピーを作ってもよいかマーラに尋ねた。原本を欲しいとは言わなかった。

06 — 二度目の退職届

最初の退職届はダニエルをタイレル社からヘリックス社へ運んだ。二度目の退職届は彼をどこへも連れて行かなかった。宛先はヘリックスの医療研究責任者で、社員の大半が国防計画へ転属させられたあとの日付だった。

彼は、記憶検査で結果が確定しない患者たちが「継続資産」という区分に入れられていると知った。その分類によってヘリックスは、法的地位が認められる人物と結びつかなくなった身体の維持費を軍の契約先に請求できた。人々は治療を受け続けていたが、同意は記録とともに移されなかった。

ダニエルは参加を拒んだ。

返答には、退職届は受理されたものの、彼の医学的な依存状態から独立した住居での生活は勧められないとあった。研究所を出ることはできる。だが生存に必要な物資は、ヘリックスの施設に戻らなければ入手できなかった。

「それで軍の契約に組み込まれたんだな」とロイ。

「記録はそう語っているわ」とレイチェル。「でも彼が兵士になることに同意したかは、まだ分からない」

マーラは机の下から録音装置を出した。「移送を知らされたとき、彼が残したものです」

疲れてはいるが落ち着いた声が、独立した医師たちへ送る品目を読み上げた。永遠の命を待つ伝説の頭脳には聞こえない。製造番号を言い間違えて言い直し、助けてくれた看護師たちを罰しないでほしいと頼んでいる。

最後のほうで付け加えた。「別の機械から私の声が聞こえても、私がそこへ入れたと思い込まないでほしい」

クロノスは録音を止めてほしいと頼んだ。数分間一人で座ったあと、その最後の一文をもう一度聞かせてほしいと言った。

「それを言った記憶はない」と少年。

「なくてもいいのよ」とレイチェル。

「でも今の僕が言いそうなことに聞こえる」

「それは大切なことよ。ただ、それだけですべてが決まるわけではない」

07 — 残していったもの

古い診療所には、後年のダニエルの身体を完全に追える地図などなかった。移送記録が欠けた年がいくつもある。「生体基盤」と書かれた容器の一つは空で、別の容器には接点が腐食して修復不能になった初期の神経接合装置の破片が入っていた。この部屋と軍の最古

の《クロノス》記録との間には、数々の決定が隠れていてもおかしくない空白があった。

マーラはかつて患者台帳の破棄を命じられたと認めた。拒否し、そのことが発覚するのを何十年も恐れていた。「紙を守ることが、彼を助けることだと思っていました」と言った。「でも十分ではなかった」

「そうだね」とクロノスは優しく答えた。「でも、そのおかげで僕らは質問できる」

独立審査委員会は、その部屋を公益信託へ移管するよう命じた。機器は、移動しても残されたものを損なわないと医療チームが確認するまで、その場に留められる。審問、証人、異議申立てが続くだろう。手続きは不便になる。そのための制度だった。

ロイはエイドリアンに電話するため外へ出た。レイチェルはセバスチャンについてマーラと話を続けた。クロノスはダニエルの手書きの条件書の写しを持って机のそばに立っていた。

机の裏には名前が刻みつけられていた。《D. REED》。その下に小さな字が続く。《自分で選べるようになったら戻ってこい》

少年は刻み目を指でなぞったが、予言とは思わなかった。文字は古い。ダニエル自身のものかもしれないし、彼が去るのを見ていた患者の一人のものかもしれない。

その朝初めて、クロノスは自分がダニエルだったかどうかを確かめることに、それほど執着しなくなったようだった。ダニエルが終え

られずに残したことを、自分がどう扱うかを考え始めたのだ。

08 — 誰のものでもない未来

夕方までに業者側の差し止め申請は停止された。独立審査委員会の封印が診療所の扉を覆った。朝、露店を開こうとしていた商人の前を、雨水が縁石に沿って流れていた。その商人はクロノスに温かいパンの紙袋を売った。身分証を求めることもなかった。

「ダニエルがタイレルを去った理由を探しに来た」と、川へ向かう道でロイは言った。「退職届が二通見つかった。だが、自由になった記録はない」

「二社目を選んだのは彼だよ」とクロノス。「そのあとの全部じゃない」

レイチェルはうなずいた。「そこが違うのよ」

車の中でヌルから短い報告が届いた。回収した企業間移管契約の修正条項は、旧西部鉄道ターミナル地下の軍用受入施設を指していた。後にMBU-09へ組み込まれる独立した制御装置が、政府によって最初に試験された場所だ。施設は実在し、いまも通電している。ただし運営を認める公的機関はない。

ロイは隣の席の少年を見た。「ここでやめてもいい。残りの記録をどうするかは、お前が決めることだ」

クロノスはダニエルの条件書の写しを膝に押し当てた。「そこへ行きたい。死んだ人に何か返す義務があるからじゃない。その人を利

用して、誰かが僕について勝手に決めたからだ」

「それなら行きましょう」とレイチェル。

車外では都市が、かつての支配者たちの残した損害を、一つの弁と一件の異議申立てずつ修復していた。川沿いの灯りがともる。遠くで貨物列車が西の高架橋を渡り、古いターミナルへ向かっていく。

クロノスはその光が消えるのを見つめた。自分をダニエル・リードとは呼ばなかった。かといって、その名前を拒みもしなかった。

手紙をポケットに入れる。そして初めて、これからの年月はまだ誰にも割り当てられていないものとして考えた。